夢中になって、対象の世界観を広げ、豊かな生活をつくりだす子どもの育成

小　学　校　　大塚　翔　　品川　崇
研究協力者　　鴛原　進（愛媛大学）

１　主題設定の理由

私たちは、前年次研究から「深い学び」を実現した子どもの姿を、

夢中になって、対象の世界観を広げ、豊かな生活をつくりだす子ども

と捉え直した。１年次研究では、「自己をひらき、自信を持って、生かし発揮しようとする子ども」の育成を目指す中で、子どもが「対象」（以下、ぎんなん学習においては、子どもの立場に立って伝えるため、「学習材」である身近な人々、社会及び自然を「対象」と表現する）に夢中になって、その世界観を自ら広げ、豊かな生活をつくりだしていく姿を見た。２年次研究では、町探検の学習において、A児が「ふぞくの町」の世界観を広げ、豊かな生活をつくりだしていく姿から主題を見いだした。

A児は、町探検で福祉施設に行くことにした。「人の役に立つ人になりたい」という理由からである。A児は、予約の電話を入れた時、担当の方に優しくされたことで、探検への期待を膨らませた。町探検では、施設の工夫に気付くとともに、担当の方の人柄に触れ、施設や働く人たちとの距離感を縮めていった。学んだことを共有する中で、「ふぞくの町はみんなのためにがんばっている優しい町」ということに気付き、「ふぞくの町のよさ」を伝えたいという思いが高まった。そこで、発表会を開くことにして、紙芝居やクイズなどで施設や担当の方のよさを伝えた。発表会を振り返る中で、いろいろなことができるようになった自分に自信を持ち、そのようにしてくれた担当の方にお礼がしたいという思いを新たに持った。お礼として本を作り、担当の方に気持ちを伝えに行った。ところが、不在のため会うことができず残念がっていたが、施設の方が代わりに出迎えてくれたことに大変喜んだ。そのことをA児は感想で「町の人はすごく優しいんだな」と述べ、担当の方と同じように施設の方にも温かさを感じることができた。それはA児にとって、気付きの質の高まりそのものであり、その後も町の人のいいところ探しをするなど、自分の生活を豊かにしていく姿が見られた。

A児は、施設や担当の方に思いや期待を抱きながら、夢中になって町探検を行った。町探検での出合いがA児の「ふぞくの町」への思いを高めるとともに、通学するだけの町であったものが「みんなのためにがんばっている優しい町」へと気付きの質を高めていった。そのようなA児は、町探検で身に付けた資質･能力を生かし発揮し、ふだんの生活を見詰め直し、自分の生活を豊かにしていった。このように、夢中になって活動に取り組む中で気付きの質が高まり、「ふぞくの町」という対象の世界観を広げ、身に付けた資質・能力を生かし発揮しようとするA児の姿は、私たちが考えるぎんなん学習で目指す「深い学び」を実現した姿であると考える。

以上のことを踏まえ、「夢中になって、対象の世界観を広げ、豊かな生活をつくりだす子ども」を、「深い学び」を実現した姿と捉え、研究主題として設定した。

２　ぎんなん学習における「子どもと創る『深い学び』」

(1)　子どもと共に学びをつなぐぎんなん学習の授業づくり

ぎんなん学習において、「深い学び」を実現するためには、思いや願いを実現する学習過程を創造することが大切である。子どもは対象との魅力的な「出合い」により自分の思いや願いを持ち、その実現に向かって夢中になって対象とかかわり「追究」する。そして、体験活動と表現活動との豊かなつながりの上に、環境からの働き掛けや他者との学び合いを通して気付きの質を高め、対象の世界観を広げる。このような学習過程の中で思いや願いが実現した時、子どもの成就感や達成感は大きいものになる。さらに、学習を「振り返る」ことで、自信を持つことができた子どもは、新たな思いや願いを持って、育まれた資質・能力を生かし発揮し、生活を豊かにしていくことであろう。

このような思いや願いを実現する学習過程を創造するには、子どもが自分事として対象にかかわることができる、子どもと共に学びをつなぐ教師の働き掛けが肝要である。その働き掛けとは、子どもの思いや願い、思考や内面を見取り、心の動きに寄り添いながら、「対象」「他者」「自分自身」とつなぐことである。そこで、教師がどのように働き掛けることで三つの対象とつないでいくかを、指導の手立てとして述べていく。

(2)　子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア　子どもと対象をつなぐ手立て（主に見方・考え方との関連）

１年次研究では、子どもと対象をつなぐために、「第０時」として単元導入前の生活の中から思いや願いが育まれるよう働き掛けてきた。そして、対象との魅力的な出合いを創出し、時空間を十分に保障しながら能動的・主体的に取り組むことができるようにしてきた。このような手立てを包括しながら、２年次では、「深い学び」に導くぎんなん学習（生活科）の見方・考え方に焦点を当て子どもと対象をつなぐ手立てを研究した。その成果として、私たちは、小学校学習指導要領解説生活編と幼稚園教育要領解説を基に、身近な生活にかかわる見方・考え方「対象を自分とのかかわりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとすること」を**表１**のように整理できた。

表１　私たちが考える「身近な生活にかかわる見方・考え方」

私たちが考える「身近な生活にかかわる見方・考え方）」	
自分の思いや願いを実現していく中で、意識的・自発的に、対象を自分のものとして見て、多様な学習活動を通して、自分のものや自分自身、自分の生活を見詰めたり、よりよくしようと考えたりすること	
「身近な生活にかかわる見方」	**【対象を自分とのかかわりで捉える視点】** 意識的・自発的に、対象を自分のものとして見ること
「身近な生活にかかわる考え方」	**【自分自身や自分の生活について考える方法】** 多様な学習活動を通して、自分のものや自分自身、自分の生活を見詰めたり、よりよくしようと考えたりすること ・　試行する、見通しを持つ、工夫するなど、ひらめき新たなものを生みだす活動 ・　関連付ける、比較する、自分自身を見詰める　など、発見し意味付ける活動

このように整理した時、「自分事」というのが「身近な生活にかかわる見方・考え方」の鍵概念であることが分かる。また、幼児期と同様に、教師の意図的・計画的な働き掛けによって、子どもが意識的・自発的に身近な生活にかかわることができるようにすることも大事である。「身近な生活にかかわる見方」として、自分を中心に据えて対象を見ること、つまり、自分のものとして見ることを示唆している。「身近な生活にかかわる考え方」として、自分のものとして見ている対象に対して、多様な学習活動を通して、いろいろな方法を考えてひらめき新たなものを生みだしたり、自分のものや自分自身について新たに発見し意味付けたりすることであると考える。

このような整理を基に、対象をつなぐため、生活科における見方・考え方を生かす三つの手立てを導き出した（**図１**）。

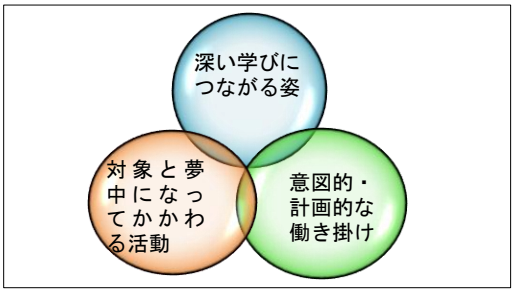

図１　生活科における見方・考え方を生かす三つの手立て

（ア）「深い学び」につながる姿

子どもと対象をつなぐには、子どもの学びが深まる時機を見計らった働き掛けが必要である。そこで、見取るための視点を持って授業に臨むことで、子どもの言動を幅広く見取り、自分事としてかかわることができるような意図的・計画的な働き掛けができるのではないかと考える。単元構想の際には、本時の目標における「深い学び」につながる姿を想定する。

（イ）対象と夢中になってかかわる活動

「深い学び」につながる姿を想定しただけでは、自分事として対象とかかわることはできない。「深い学び」につながる姿が表れるためには、子どもが対象と夢中になってかかわる活動を設定することである。活動には、ひらめき新たなものを生みだす活動と、発見し意味付ける活動がある。これらの活動を通して、子どもが対象に自分事としてかかわり、自分のものや自分自身、自分の生活とつなげて考えることができるよう、計画的に活動を設定することを大切にする。

（ウ）意図的・計画的な働き掛け

「深い学び」につながる姿を想定し、それが表れる活動を設定した上で、教師の意図的・計画的な働き掛けを講じることで、子どもは対象とつながり、「深い学び」へ導かれていく。教師の意図的・計画的な働き掛けとは、問い返したり多様な活動へ促したりして、子どもと対象を直接的につないでいくことであるが、子どもの活動に合わせて即興的に対応していく働き掛けもあるだろう。

イ　子どもと他者をつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

（ア）他者とのつながりを感じながら対象の世界観を広げる単元の構想

子どもが他者と学び合うことができるように、他者とのつながりを感じながら対象の世界観を広げる単元を構想する。そのために、子どもが思いや願いの実現に向かう中で、他者との対話を生む体験活動を充実させることや、他者との対話を深める表現活動を工夫することを大切にする。この「体験活動の充実」と「表現活動の工夫」が繰り返し往還しながら、他者とのつながりを高めていく単元を構想することで、他者と共に追究する楽しさや喜びを感じるとともに、気付きの質を高めながら対象への世界観を広げるだろう。

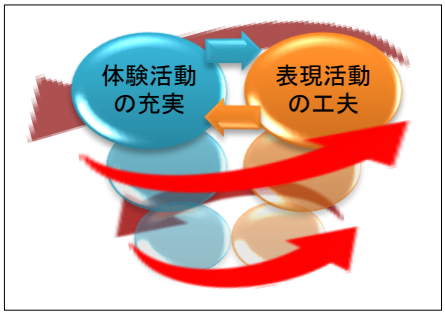

図２　体験活動の充実と表現活動の工夫の往還

（イ）他者との対話を生む「体験活動の充実」

「体験活動の充実」とは、他者との対話を生むために、体験活動の中に必要感のある対話を設定したり、自然と協力したくなるような環境構成を工夫したりすること、また、異年齢の子どもや地域の方等の交流活動のことである。例えば、「教師が周りの子どもを交えて遊んだり、互いにアドバイスを求めるよう促したりして、必要感のある対話を設定する」などである。

（ウ）他者との対話を深める「表現活動の工夫」

「表現活動の工夫」とは、他者との対話を深めるために、視点を明確にした構造的な板書にしていくことや思考ツールを使って気付きを関連させていくこと、ＩＣＴを活用して伝え合う活動を活発にさせていくことなどが考えられる。また、子どもが表現したくなる機会を柔軟に設定し、ものづくりや劇など多様な表現方法を保障していくことも、他者との対話を深めることになるだろう。

ウ　子どもと自分自身をつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

（ア）自分自身とのつながりを感じ、豊かな生活をつくりだす二段階の振り返りの設定

思いや願いの実現に向けて対象にかかわり続けた自分自身に気付くことができるように対象について振り返り、学びを自覚する機会を追究の場面の終末に設定する。そこで生まれた新たな思いや願いは、振り返りの場面によって、子どもが身に付けた資質・能力を生かし発揮して成就されていく。このような学習過程の終末に今まで学んできた学習を振り返り、「対象」「学び方（他者）」「自分の成長（自分自身）」について学びを自覚する機会を持つ。そうすることで、子どもは育まれた資質・能力を確かに自覚し、自分への自信を感じるとともに、生活を豊かにしていこうとするだろう。

（イ）過去の自分自身とつなぐ働き掛け（①これまでの学習を振り返る自己評価）

子どもには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が資質・能力として育まれている。

これらは学習を通して身に付ける資質・能力に系統的につながるものである。そこで、幼児期の経験を引き出す働き掛けをすることで、学習に生かすことができるようにする。例えば、「保育所の時はどのようにしていたか」「幼稚園の時と比べて今はどうなっているか」などである。

（ウ） 現在の自分自身とつなぐ毎時間の振り返りカード（②自分の学習結果を振り返る自己評価）

現在の自分自身とつなぐものとして、毎時間の振り返りカード「〇〇物語」を活用する。この振り返りカードは、前時の気付きとつなげることができるようにするため、ウェビングマップの手法を生かして一枚の用紙に振り返ることができるようにする。子どもにとって、短い時間で書くことができ、前時の続きから単元終末に向かって製作するため、主体的に振り返ることができる。

（エ）未来の自分自身につなぐ単元終末の振り返り（③どのような学習をして、どのような学習活動が有効だったかを振り返る自己評価、④自己の変容を振り返る自己評価、⑤次への学習の見通しを持つ自己評価）

単元終末の振り返りは、「対象」「学び方（他者）」「自分の成長（自分自身）」の三つの視点で学びを自覚できるようにする。学びを自覚する中で、これからの生活に生かしたいことや取り組んでみたいことを価値付け、未来の自分自身につなぐように働き掛ける。このようにすることで、子どもは自発的に自分の生活を豊かなものにしていくと考える。

(3)　「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア　評価の基本的な考え方

「深い学び」を評価するに当たり、単元における「深い学び」を実現している状態を考える必要があるだろう。そのうえで、そこに向かうまでの「『深い学び』につながる姿」を想定しておく。その姿を評価し、それを基に指導に生かしたり指導を改善したりして、「深い学び」に導いていく。その評価のために必要不可欠なことは、子どもを見取ることであろう。子どもの学びを丁寧に見取り、その姿を豊かに解釈することにより、初めて効果的に指導に生かすことができるとともに、資質・能力を適切に評価することができる。そのためには、広い目、長い目、基本の目、今の目を大切にして子どもの学びを多面的に見取ることができるようにし、「深い学び」を評価していく。

イ　見取りの手立て

（ア）広い目による見取り

広い目による見取りとは、子どもの学びを空間軸でつなげて見取ることである。授業中の様態や発言だけでなく、学習カードの記述や成果物、写真、動画など、多様なものから学びを見取り、評価していく。特に、振り返りカード「〇〇物語」に重きを置き、子どもの振り返りや教師の称揚、価値付けが見えるように紙面を工夫したもので、学びの軌跡を教師や子ども自身が見取ることができるようにする。

（イ）長い目による見取り

長い目による見取りとは、子どもの学びを時間軸でつなげて見取ることである。子どもの考えや行動がどのように変容したのか、今ここにいる子どもはこれからどのようにしていきたいのかなど、資質・能力を長い目で見取り、その足跡を記録することで、単元終末における評価となる。

（ウ）基本の目による見取り

基本の目による見取りとは、「深い学び」につながる姿を基に見取ることである。単元における「深い学び」につながる姿を見取るための評価方法、評価規準、「『深い学び』につながる姿」の見取りの視点を設定するなど、綿密な評価計画を立てることを大切にする。

（エ）今の目による見取り

今の目による見取りとは、本時における見取りの視点を基に、目の前の子どもの言動から課題意識を見取り、「深い学び」につながるよう指導に生かすことである。まず、子どもの様子を全体的に俯瞰する。次に、気になる子どもと対話したり一緒に活動したりしてかかわる。かかわりながら子どもの課題意識を見取り、見取りの視点と照らし合わせて評価する。評価したことを基に、課題意識が「深い学び」につながっていくよう指導に生かす。授業後には指導したことを再度評価し、次時の活動予定を修正する。ただし、その時間に全ての子どもを見取ることはできない。今の目による見取りを毎時間積み重ねながら、単元を通して全ての子どもを見取っていくことを大切にしたい。

（大塚　翔）

４　研究のまとめ

⑴　子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア　「出合い」の場面（主に子どもと「対象」をつなぐ手立て）

○　「第０時」として単元導入前の生活の中から子どもの心が動くようよう働き掛け、「もっとやってみたい」「自分で見付けたい」などの思いや願いを育てることで、思いや願いを持って能動的・主体的に「対象」にかかわることができた。

○　生活科における見方・考え方についての解釈を深め、見方・考え方を生かす手立てを見いだしたことで、子どもが「対象」を自分事として捉え、意識的・自発的にかかわることができるよう働き掛けることができた。

●　学習の流れの中で自然と見方・考え方を生かしているのか、教師の意図的・計画的な働き掛けによるものなのか有効性を判断することが難しかった。子どもが見方・考え方を生かしている具体的な姿を見取り、考察していく必要がある。

イ　「追究」の場面（主に子どもと「他者」をつなぐ手立て）

○　「体験活動の充実」と「表現活動の工夫」が繰り返し往還しながら、他者とのつながりを高めていく単元を構想することで、他者と共に追究する楽しさや喜びを感じるとともに、気付きの質を高めながら対象への世界観を広げることができた。

○　子どもがつながるよう環境構成を工夫したり、個の活動が必然的に集団の活動になるよう対話を設定したりして体験活動を充実させるとともに、思考ツールの活用や構造的な板書による表現活動を工夫することで、他者とつながり活動を広げ、気付きの質を高めていくことができた。

●　タブレット端末によるＩＣＴを活用した伝え合う活動については課題が残った。タブレット端末で子どもの活動を活発にしたり、子ども同士をつなぎ、気付きの質を高めたりしていくには、生活科におけるＩＣＴ活用における研究を続けていく必要がある。

ウ　「振り返り」の場面（主に子どもと「自分自身」をつなぐ手立て）

○　単元構想の中で、自分自身とのつながりを感じ、豊かな生活をつくりだす二段階の振り返りを設定したことで、子どもは育まれた資質・能力を確かに自覚し、気付きの質を高めるとともに、自分に自信を持つことができた。

○　振り返りの際に「対象」「学び方（他者）」「自分の成長（自分自身）」の具体的な視点で振り返ることで、自分ができるようになったことや成長したことが明確になり、自信につなげるとともに、これからもしたいことなど未来の自分自身にもつなげることができた。

●　思考ツールを使った単元終末の振り返りの重要性は確認できたが、その振り返りの活動に子どもにとっての必然性を持たせることができなかった。この時間の取り扱いを、子どもたちの必要間のある物として位置付けるような工夫を模索したい。

⑵　子どもと創る「深い学び」における評価について

○　振り返りカード「〇〇物語」を中心に毎時間振り返ることで、子どもが意欲的に振り返るとともに、教師は毎時間の子どもの学びの姿を振り返りカードからも評価することができた。

○　長い目、広い目、基本の目、今の目で子どもの姿を見取ることで、子どもの活動を空間軸と時間軸で見取ることができた。特に、今の目は、子どもの姿を授業中に見取り、指導に生かしたり、授業後にじじの学習に反映させたりすることができた。

●　長い目の見取りでは毎時間の個々のエピソードを記録したり、今の目の見取りでは授業後の想起に時間が掛かったりして、時間と労力を要する作業であった。これらは、教師自身の見取る力に依拠するところが大きいので、今後は手立てと研修を兼ねた評価として究研を進めていきたい。

「夢中になって、対象の世界観を広げ、豊かな生活をつくりだす子ども」の姿が表れた子どもは、ぎんなん学習のみならず、他教科等の学習や実生活においても、自信を持って取り組む姿が見られる。「自信を持つ」ことは、生きる上ですべての原動力となり、それが自立への基礎を築いていく。育まれた資質・能力は、大人になり問題に直面した時もその問題解決のため他者と協力しながら、持てる力を余すことなく発揮するだろう。そして、自分の力で自分の未来を切り拓いていくと信じている。

（大塚　翔）